

## カーソン・マッカラース 『結婚式のメンバー』における境界なきユートピア

大 野 真\*

Carson McCullers (カーソン・マッカラース) (1917-67) は、二十世紀中葉のアメリカ南部女性作家を代表する一人である。

彼女の生涯は病苦に付きまとわれたものであった。十五歳の時にリウマチ熱にかかり、その後も心臓病と乳がんを患い、さらに三十歳の時には卒中のために右目を失明している。また、二十歳の時に結婚した夫はアルコール中毒であり、結婚生活も不幸なものであった。このような実生活上の体験もあり、彼女は人間存在の孤独さについて深い関心を持つようになっていった。

最初の長編小説で彼女の代表作でもある *The Heart Is a Lonely Hunter* (1940) は聾啞者を主人公とした作品であり、作者が生涯追及した「孤独」の主題が既に色濃く現れている。

本論で扱う中編小説 *The Member of the Wedding* (『結婚式のメンバー』) (1946) でも、やはり「孤独」が大きな主題となっている。主人公である十二歳の少女 Frankie Addams (フランキー・アダムズ) は、自分が住んでいる町や周囲のグループに溶け込むことができない孤独な存在なのである。本論の前半では、フランキーが特定のグループに帰属し同一化することのできない原因を、少女の身体の移ろいやすく不安定な流動的性格を中心にして論じていきたい。

また、『結婚式のメンバー』の特徴としては、現実世界において孤独な少女フランキーが、自分の帰属可能な世界を求めて想像力を働かせることがある。とりわけ、フランキーは、兄の結婚式に参加することを契機として、アラスカやアフリカなどの未知の世界に出て行くことを空想するのである。このように現実世界から想像的世界に向かってフランキーが空想の翼を羽ばたかせる場面はみずみずしい文体で描かれており、音楽家を志したこともある作者の詩的な感性が十分に表れている。本論の後半では、フランキーの空想する想像的世界の持つユートピア的性格を、現実の南部世界を束縛する人種問題を背景にして考察してみたい。

### 1. 同一性と流動性

『結婚式のメンバー』において、主人公の少女フランキーが黒人女中 Berenice を相手にして、世の中の決まりごとについて様々な疑問を提出する場面がある。

まず、フランキーは、自分が名前を Frankie から F.Jasmine に変えたことに関して、なぜ名前を変えると法律に違反することになるのかを疑問に思う。自分の好む名前に変えても何ら不都合は無いではないか。しかし、フランキーの疑問に対して、ベレニースは、そんなことをしたら混乱が生じてしまう、とたしなめる。仮に皆が違う名前になってしまったのならば、誰が誰やら分からず、世の中全体が狂ってしまう、自分の持つ名前の回りに様々な事柄が蓄積しているのだから (“Because things accumulate around your name”), とベレニースは言う (561)。

この場面において、名前によって示される個人の同一性を基盤にして社会が成立していることが、ベレニースの口を通じて指摘されている。

しかし、フランキーはさらに問いを続ける。「緑の木が見えるとするでしょう。私にとってはその木は緑色。あなたもその木を緑色と呼ぶわ。そしてこの点に関しては私達の意見は一致すると思う。でも、あなたが緑色として見る色は私が緑色として見る色と同じかしら？それから、ある色を黒と呼ぶとするわよね。でも、あなたが黒として見る色は、私が黒として見る色と同じかしら？」(563)

この問いで示されていることは、仮に名前が同じであっても、その名前が指す対象は異なる場合がありうるということだ。つまり、名前をつけて区分を設けることで人間社会が成立しているにせよ、そのような名付けによる区分は絶対的なものではなく、名前と実体の間にはずれがある。ともすれば我々は名前による区分を絶対視して、同一の名前をもつものは同じものであると考えがちであるが、そのような習慣は過ちにつながりかねない。対象のもっている流動性や微妙な差異は、名前の示す固定した同一性によっては捉えきれないものなのである。

ベレニースは、フランキーの青臭い考えをたしなめつつも、こうした名前の区分による個人の同一性が、我々の自由を束縛して囚われの身にしてしまうことも承知している。「私は生まれた時からベレニースで、あんたはフランキー。ジョン・ヘンリーは生まれた時からジョン・ヘンリー。私達は自分の幅を広げて自由になりたいと思うかもしれない。でもどうあがいたって、やっぱり囚われの身のままよ。私は私、あんたはあんた、ジョンはジョン。一人一人が自分自身によって何かしら囚われているの」(567)。

さらに、ベレニースは「私はあんたよりももっとひどく囚われているの」と言い、その理由として、自分が黒人であり有色人種であることを挙げている(567)。ここで、名前による区分が肌の色による区分と結び付けられていることが注目される。つまり、名前による区分は社会を成立させる原理であると同時に、差別を生ぜしめる大本でもあるのだ。元来は流動的な人間存在が、「黒人」という名前によって固定的なイメージや役割を与えられてしまい、そうした固定的な枠組みに束縛されることになってしまうのである。

## 2. グロテスクな存在としての流動性——少女の身体

社会によるこのような区分の固定化とそれが内包する差別と排除の論理を、フランキーは鋭く感じ取る。フランキーは十二歳であり、身体が急激に成長中であるため、非常に不安定で流動的な存在、大人社会の固定化された区分にはなじまない存在として描かれているのである。

Erik H. Erikson は *Childhood and Society* において、成長期の人間が本質的に不安定で流動的な存在であることを以下のように表現している。「成長するということは、各々が異なった速度で動く異なった部分に分割されることを意味する。成長しつつある少年は、自分の分裂した精神だけではなく、ひよろひよろとした自分の身体をも制御しかねるのである」(211)。

急激に変化していくがゆえに自分自身でさえも制御できない心と身体。「異なった速度で動く異なった部分」に分割されているために、全体との統一や調和を欠いた身体。このような身体は、『結婚式のメンバー』において、「化け物(freak)」という言葉で表現されている。例えば、急激に背が伸びたフランキーの身体は以下のように描かれる。「この夏彼女はひどく背が伸びて、ほとんど巨大な化け物(a big freak)になり、そして肩幅は狭く、両脚はやたらと長かった」(462) この描写においても、やたらと長くなった両脚という具合に、全体との調和を欠いた「部分」が強調されている。また、フランキーの急激な成長ぶりは、自分自身でも制御できないものである。「もしも彼女が十八歳の誕生日までこの調子で背が伸びていくとしたら、これから後、五年と六分の一年伸びていくことになる。したがって、計算によると、彼女が自分でなんとか止めなければ、九フィートを超すまで背が伸びてしまうだろう。九フィートを超した娘とは何という代物だろう。化け物である」(475)。

フランキーは自らの制御不可能な身体に対して、「化け物」という言葉に表れている恐怖の感情と共に、戸惑いも

感じている。Lawrence Graver は、フランキーが自分の気持ちをしばしば “curious” や “queer” や “puzzling” といった言葉を用いて表わそうとすることを指摘しているが (Graver 34)、制御不可能な身体は、なによりその持ち主自身を戸惑わせる存在なのである。十二歳という思春期初期の少女の急激に成長しつつある流動的な身体を、制御不可能な化け物というグロテスクな存在として描いたことがこの作品の特徴である。

さらに、フランキーの流動的な身体は、男女の性の区分を揺り動かすものとしての性格を与えられている。フランキーは長身であるばかりでなく、ナイフ投げやピストルを好み、「彼女の髪型は男の子のようであった」(462) という具合に男の子的要素を与えられている。フランキーは男女の固定的な枠組みには収まりきれない存在なのだ。

しかし、このようにフランキーが両性的な性格をもつことは、女性社会と男性社会の両方に入っていけることを意味してはいない。むしろ、その両性的性格ゆえに、どちらの社会からも排除されてしまうのである。両性的存在の持つ流動的な性格は、固定化された区分を基盤にした社会とは相容れないものだ。

まず、フランキーは、町の十三～十五歳の娘達が属しているクラブのメンバーになることができない。「近所にはクラブハウスがあったが、フランキーはそのメンバーではなかった。このクラブのメンバーは、十三歳、十四歳、更には十五歳の娘達であった。彼女達は土曜の夜になると男の子達とパーティを開くのであった」(469)。このクラブは定期的に男の子達とパーティを開くことから分かるように、男女の性の役割と区分化を基盤にしている。十二歳のフランキーは、このクラブの娘達にとっては「幼すぎて下品過ぎる (too young and mean)」(469) ために排除されてしまうのである。

Sarah Gleeson-White は、*Strange Bodies* において、バフチンのグロテスクに関する理論を用いてマッカラズの登場人物達を分析したが、その際に Mick Kelly やフランキーといった思春期の少女達が持つ「男の子らしさ (boyishness)」に注目し (11)、それが「南部の令嬢の理想 (the ideal of the southern belle or lady)」と鋭い緊張関係を生むことを指摘している (13)。思春期のグロテスクな身体は、女性に関する固定化された規範を揺り動かす存在なのである。

しかし、フランキーは娘達のクラブから排除される一方で、男性的世界に入り込むこともできない。フランキーは自らの男の子的要素を自己解放の糸口にしようと空想するが、その試みは失敗に終わってしまうのである。

この作品の舞台はアメリカ南部であるが、ヨーロッパにおいては第二次世界大戦が進行中であり、ドイツとアメリカとの戦闘の様子がラジオで報道されている (474)。しかし、フランキーは、男の子になって海兵隊員として参戦したいと願いながらも、戦争に加わることはできず、戦争においても除け者にされてしまったかのような憂鬱な気分を味わう (480)。また、フランキーが家出を試みる際にも、「(家出後に) もしも列車がニューヨーク行きだったら、男の子のような格好をして、名前と年齢を偽って海兵隊に入ろう」(593) と空想するが、結局、家出の試みは失敗に終わるのだ。

このようにフランキーは女性的要素と男性的要素の両方を兼ね備えながらも、むしろその両義的性格ゆえに、性的役割の区分を基礎とした社会 (娘達のクラブや海兵隊) からは排除される。固定化した社会において、流動的な両性具有的身体は異端児であり、「化け物」と見なされてしまう存在である。フランキーの見物する化け物小屋においても、半身が男で半身が女の両性具有者が化け物の代表として (そしてフランキーの類縁的存在として) 描かれているのだ (476—477)。

さらに、マッカラズは、両性具有を一步進めて、性転換の可能性をも示唆している。例えば、ベレニースはフランキーに対して、Lily Mae Jenkins という男が別の男と恋に落ちたあげくに性転換して女になってしまった逸話を物語る (532)。このように、男性的要素と女性的要素は混在しうるだけではなく、さらに、相互転換可能なものである。マッカラズにとって、両性の区分は固定的なものではなく、相互転換可能な流動的なものである。

マッカラーズは、十二歳の少女フランキーの急激に成長する身体をあくまでも流動的な存在として捉え、その制御不可能性、全体とのバランスを欠いた部分の増殖、両性具有性（さらには両性の転換可能性）といった特徴を明らかにした。さらに、このような流動的な身体が、固定的な区分を基盤にした社会においては、「化け物」という名前で示されるグロテスクな存在と見なされてしまうことも示したのである。

### 3. グロテスクな存在はいかにしてメンバーとなりうるか。——境界なき世界

しかし、ここで注意すべきは、マッカラーズが、フランキーというグロテスクな存在を否定し拒絶しているわけではないことである。むしろ、フランキーの身体の危うい流動性は、固定化された社会に対する批判原理として機能し得る。流動的な存在であるフランキーであればこそ、本論の冒頭で掲げたような、固定化された社会に対する根本的な疑問を提示することができるのだ。『千のプラトー』において、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリは少女という存在について以下のように述べている。「したがって少女たちは特定の年齢や性別に、あるいは特定の秩序や領界に帰属することがない。むしろあらゆる秩序や行為、あらゆる年齢や性別のはざまに滑り込むというべきだろう」(319)。このように少女を中間的な存在として解釈することによって、逃走線としての可能性を少女に託することができる。とくにフランキーの十二歳という年齢は微妙な年であり、もはや子供の世界に属することもできず<sup>1</sup>、だからといって、十三～十五歳の娘達が入るクラブに属することもできない。マッカラーズはフランキーの年齢を十二歳と設定することにより、少女のもつ中間的な性格を際立たせている。

さらに、この作品全体は、こうしたグロテスクな存在が排除されずにメンバーとなるのはいかにして可能かという問いをはらんでいる。フランキーはグロテスクな存在であるがゆえに、自分が世界から分け隔たれていることを強く意識している。しかし彼女は、こうした疎外状況に自足しているわけではなく、何とかして世界に参入してその一部となることを強く願って行動を起こすのであり、そこにこの小説の冒険が存在するのだ。

まず、世界に参入するために、フランキーがF・Jasmineという具合に名前を変えたことが注目される。このように名前を変えることで、フランキー／F・ジャスミンは、今まで疎外されていた町に帰属できたかのような気分を味わう。彼女は、突如として町のメンバーとなり、世界に「含まれた (include)」かのように感じて町を歩き回るのである (502)。

名前によって個人の同一性が保たれるのであるが、それによって自分が束縛されてしまうことをフランキーは強く意識していた。彼女は、名前を変えることによって、流動的な自分という存在を、名前の表わす固定した同一性の束縛から解放しようと試みたのである。

ここで、フランキーの変名という行為は、兄の結婚式という儀式と結びついている。フランキーが新しい名前としてF・ジャスミンという名前を選んだ理由は、Jasmineという名前が、兄のJarvisや花嫁のJaniceという名前と、最初の二文字(JとA)が共通しているためである (474)。ジャスミンという名前に変えることで、兄夫婦の結婚式に象徴的な意味で参与しようとするのだ。

さらに、兄の結婚式は、より広い世界へと通じる入り口になっている。兄の結婚式の一員(a member of the wedding)になることは、取りも直さず、それまで排除されてきた世界に新たな形で参入することなのだ。「彼女[フランキー]は兄と花嫁を愛していたし、彼女は結婚式の一員であった。三人は共に世界に入っていく(go into the world)、常に一緒にあり続けることだろう」(501)。

結婚式に参加することを通じて世界に入っていく——つまり、結婚式の一員となることは、広い世界の一員となることなのだ。こうした世界への参与の願望は、以下のフランキーの台詞に魅力的に描かれている。

そして私達は会うのよ。あらゆる人に。人びとのところに歩み寄ってみると、すぐに誰だか分かるの。暗い道

を歩いていて、明かりのついた家を見つけてドアをノックすると、見知らぬ人が駆け寄って出迎えて、さあさあお入りなさい、と言うの。勲章を貰った飛行士達やニューヨークの人達や映画スターとも知り合いになるの。友達は何千何万と数え切れないくらいできるのよ。沢山のクラブに入っているの、いちいち構ってられないくらいなの。全世界の一員（members of the whole world）になるのよ。（565—566）

ここでフランキーが空想する「全世界（the whole world）」とは、自己と他者との隔たりが消滅したユートピア的社会である。十二歳のフランキーが持つ自我の拡大と世界への参与の願望に応じて、参入すべき世界の理想像も拡大されていき、隔たりの無いユートピア的「全世界」の形を取ったのである。

このようなユートピア的「全世界」においては、自他の区別は無く、性差や人種の相違による差別も無い、固定的な価値基準を基にして他を排除する集団も無い。フランキーはあくまで流動的な身体と精神を持つがゆえに、固定的な価値基準を基盤とした集団から排除され、自らを「化け物」として意識せざるを得なかった。そうしたフランキーが差別を受けることなく帰属することができるのは、唯一このようなユートピア的「全世界」なのだ。兄の結婚式は、このような「全世界」へと通じる入り口としての儀式と考えられる。グロテスクな存在がメンバーであり得るのは、このような絶対的無差別の「全世界」である。

#### 4. 想像的・可能的世界としてのユートピア

しかし、このような「全世界」とは、ユートピア的であるがゆえに現実には成立し得ず、それ自体不安定で流動的な存在なのである。こうした「全世界」に対するフランキーの空想とは裏腹に、小説中の現実においては、排他的な集団が数多く存在し、性差や人種の相違による差別が行なわれ、さらには民族間での戦争が繰り広げられているのだ。（フランキー自身、男になりすまして海兵隊に入り、戦争で手柄を立てたいと空想する。）

グロテスクな存在が帰属すべき「全世界」とは空想的な性格を免れ難いものであり、あるいはこれを肯定的に言いかえると、想像力の力によって、グロテスクな存在も自らの帰属すべき世界を作り出すことができるのである。そうした想像上の世界は現実の世界とは異なるものであるがゆえに、可能性の世界と言えるであろう。それゆえに、この小説は、可能的な世界を目指しての、想像力の力による冒険に満ちている。

例えば、フランキーは自分の暮らしている現実の世界を狭苦しく感じており、未だ見ぬ未知の広い世界に参入することを熱望する。彼女にとって未知の世界を象徴するのが、メキシコ湾の貝殻とアラスカの雪という二つの物である。<sup>2</sup>

フランキーの前には二つの物があった——薄紫色の貝殻と、雪が入っていて揺らすと吹雪のようになるガラスの丸い器であった。貝殻を耳に当てると、メキシコ湾に打ち寄せる暖かい波の音を聴くことができ、遠く離れた緑の棕櫚の島を思い描くことができるのだった。また、雪の器に細めた眼を当てると、白い雪片が旋回して目の前が真っ白になるのであった。彼女はアラスカの事を夢想した。（469）

フランキーはそれまで雪を見たことがなく（467）、それゆえに、雪は未知の物であり、雪で満ちたアラスカは想像力の世界、可能性の世界に属するのである。

フランキーの兄であるジャーヴィスの結婚は、こうした可能性の世界であるアラスカと結びついている。

ジャーヴィスはアラスカに行く直前にウインターヒル（Winter Hill）の娘と婚約していた。ジャーヴィスは陸軍の伍長であり、ほとんど二年間をアラスカで過ごした。フランキーは本当に長い間兄に会っていなかった。兄の顔は仮面をかぶったようになり、また、水面下の顔のように絶えず変化するのであった。ああ、アラスカ！フランキーは絶えずアラスカの事を夢想していたが、とりわけこの夏はアラスカが非常に身近なものになったのである。（464）

以上の引用文において、フランキーが兄とは長い間会っていないために、兄の顔の記憶が定かではなくなっていて、夢の領域に溶けこんでいる点に作者の計算がうかがわれる。それゆえに、フランキーが想像する結婚式の光景において、兄の顔は「真っ白な輝き (brightness)」と表現されており、花嫁もまた「顔のはっきりとしない (faceless)」存在なのだ (462)。

このように兄の結婚式は夢の領域にあるために、結婚式の行なわれる場所であるウインターヒルは、夢の中においてアラスカと融合する。『ウインターヒル』と、フランキーは目を閉じてゆっくりとつぶやくと、その名前はアラスカと冷たい雪の夢に溶け込んだ (465)。

フランキー／F・ジャスミンは兄の結婚式を契機にして、未知の世界を次々に訪れることを空想する。自分と兄と花嫁の三人で、冷たいアラスカの空の下を歩いたり、アフリカやビルマを旅することを夢見るのだ (523)。このように、フランキーがメンバーになることを願う「結婚式」とは、想像の世界に通じる入り口としての祝祭なのである。

それゆえに、物語の後半において、現実の結婚式は幻滅に終らざるを得ない。兄の結婚式に出席したフランキーは以下のような感想を抱く。「結婚式はまるでひどいものであった。具体的に何処が悪いと指摘することはできなかったけれども」 (589)。あるいは、「結婚式は彼女の力の及ばない夢、あるいは、彼女のあずかり知らないショーのようであり、そのショーでは彼女には何の役も与えられないことになっていたのだ」 (590)。

フランキーは本当の意味では結婚式のメンバーになったと感じることはできなかったのであるが、それでも彼女は世界の中に出て行こうと考えて家出を決意する (593)。しかし、世界への入り口としての役割を結婚式が果たせなかった以上、直接世の中に出て行こうとするフランキーの試みもうまくいかない。家出をして父親のもとを飛び出した彼女は、結局、父親が連絡した警察——“the Law”という言葉で抽象化されている——の手によって捕捉されてしまうのだ (599)。物語の結末では、フランキーは Frances という大人の娘としての名前を受け入れることになる。

さて、このように考えると、この小説は、十二歳の少女の空想が現実の力によって屈服させられる物語にしか過ぎないのであろうか。Louise Westling はこの小説全体の進行を、フランキーが自らの女性としての性を結局受け入れざるを得ない屈服に向かっての物語としているが (160)、そのように考えるのならば、フランキーの空想も “absurd fantasy” (162) と評価されるべき馬鹿げたものになってしまうであろう。

しかし、フランキーの空想は単なる思春期のたわいのないものではない。フランキーの想像する世界、あるいは彼女の感性が感じ取る世界は、死者の世界にも通じているのである。現実と想像との対比がさらには生と死の対比に発展していくことで、この小説に奥行きが与えられている。

この小説の中では様々な「死」が語られる。まず、Uncle Charles の死である (516)。チャールズの死を聞かされても、兄の結婚式のことで夢中のフランキー／F・ジャスミンは以下のように思う。「そう、彼は死んだ。でもそれは結婚式とは何の関係もないことだ。そのため F・ジャスミンは次のように言っただけだった。『お気の毒なチャールズおじさん。本当に残念ね』」 (516)。

しかし、「結婚式とは関係ない」はずなのに、チャールズの死は、フランキーにさまざまな死者の記憶を思い起こさせる。自分が出産した日に死んだ母や、自分が九歳の時に死んだ祖母、など (542)。そして、フランキーは、結婚式のことを考えると身が震えるのと同様に、自分の知っている人間が七人も死んでいると考えても身が震えてしまうとベレニースに語るのである (544)。この小説の最後も、いとこの John Henry が脳膜炎で死んでチャールズと同じ墓地で埋葬される話で終るのだ (604)。

つまり、結婚式と言う「生」の祝祭の背後には「死者」達の世界が存在しているのであり、十二歳の少女フランキーはそうした「生」と「死」の表裏を為す世界を可能性の世界として感じ取っているのである。

これらの死者達の中で、特にベレニースの最初の夫である Ludie Freeman に注目したい。黒人女中であるベレニースは、フランキーにとって良き話し相手である。ベレニースは四回結婚しており、四番目の夫には虐待を受けて左眼をくりぬかれてしまった(484)。そのため、左眼には青いガラスの義眼をはめている(463)。黒人であり、夫による虐待の経験を持ち、片目が義眼でありながらも、しかし彼女は決して萎縮した存在ではない。実際は「美しくない」(535)にも関わらず、「ベレニースは常に自分のことを非常に美しい人間であるかのように語る」(534)のだ。Margaret B. McDowell の表現を借りれば、ベレニースは「肯定的な力 (a force of affirmation)」なのである(92)。<sup>3</sup>

ベレニースが今まで結婚した四人の夫達の中で唯一愛しているのは、死者となったラディ・フリーマンである(543)。ラディの死後に結婚した三人の夫は全員ひどいものであり、新しい夫は前の夫よりもさらにひどかった(484)。特に最後の四番目の夫には、ベレニースは片目を抉り出されてしまったのである。ベレニースは言う。

わたしはラディを愛していて、彼は私が愛した初めての男だったのよ。だから、その後はずっと似たもの探し (go and copy myself) をしなければならなかったの。わたしのしたことは、ラディにちょっとでも似た男に出くわしたら結婚してみることだったの。その連中が結局ラディのできそこない (the wrong pieces) だったのが不運と言うものね。私の望みは私とラディの関係を繰り返す (repeat) ことだったの。(555)

死者であるラディはその後の全ての夫達よりも優越する存在なのであり、ベレニースは死者との関係をコピーし反復しようとする(失敗に終るべき)作業を繰り返すことになる。

このようにラディは理想化された死者なのであるが、単にベレニースにとっての理想的な一人の男性という個人的なレベルを超えた存在として扱われている。ベレニースは、神のもとで人種間の差別や争いがなくなる世界を夢想する。「まず、世界には有色人種と言う区別が無くなり、全人類は青い瞳と黒髪をした淡い褐色の肌の人間になる。有色人種も白人も無くなり、有色人種が生涯を通じて惨めで情けない思いをさせられることも無い。有色人種は無くなり、全ての人間は、男も女も子供も、地上においてお互いに愛し合う一つの家族になる」(546)。さらに、「戦争も無くなる、とベレニースは言った。ヨーロッパで木から硬直した死体が吊り下げられることも無く、ユダヤ人がどこかで殺されることも無い。戦争も無くなり、若者が軍服を着て家族から去ることも無く、野蛮で残酷なドイツ人や日本人もいなくなる。全世界で戦争がなくなり、何処の国でもみな平和になることだろう。…世界には戦争も飢えも無くなる。そして、その時、ラディ・フリーマンは生き返るのだ」(546)。

以上の引用文で、人種間の差別無きユートピア的世界において、ラディが生きかえるとされている点が注目される。この作品でベレニースやフランキーが空想するユートピア的世界は、死者の世界に通じているものなのである。あるいは、死者の世界をも想像力によって取り込んだ可能的世界である。現実の世界においては排除されたり差別を受けたりするグロテスクな存在も、こうした生と死の境界を越える可能的世界においては、そのメンバーとして受け入れられることができるのだ。

マッカラズは、『結婚式のメンバー』において、十二歳の少女のあくまでも流動的な身体をグロテスクな存在として描いた。しかし、そうしたグロテスクな存在は、固定化した社会に対する批判因子として機能しているのであり、また、グロテスクな存在もメンバーとなり得るユートピア的な可能的世界を想像力の力によって垣間見させてくれるのである。

〔注〕

- 1 Samuel Chase Coale, V は、マッカラーズの描く南部像を、荒野であると共に “a strange childhood retreat” (137) の性格をもつものとして特徴付けたが、それと同時に、「性」が子供時代を破壊してしまうとも述べている (153).
- 2 マッカラーズは自伝の中で、ニューヨークに行って、生まれて初めて海や雪を見た時の感動を述べている (*Illumination & Night Glare* 15).
- 3 ただし、この作品の戯曲版においては、ベレニースその他の黒人像がかなり類型化されてしまっていることを Thadious M. Davis は指摘している (209—212).

引用文献

- Clark, Beverly Lyon, and Melvin J. Friedman, eds. *Critical Essays on Carson McCullers*. NY: G.K.Hall, 1996.
- Coale, V, Samuel Chase. *The Role of the South in the Fiction of William Faulkner, Carson McCullers, Flannery O'Connor, and William Styron*. Ann Arbor, Mich.: UMI, 1973.
- Davis, Thadious M. “Erasing the ‘We of Me’ and Rewriting the Racial Script: Carson McCullers’s Two Member(s) of the Wedding.” Clark and Friedman 206-219.
- Dews, Carlos L., ed. *Illumination and Night Glare: The Unfinished Autobiography of Carson McCullers*. Madison: U of Wisconsin P, 1999.
- Erikson, Erik H. *Childhood and Society*. 2nd ed., rev. and enl. NY: Norton, 1963.
- Glesson-White, Sarah. *Strange Bodies: Gender Identity in the Novels of Carson McCullers*. Tuscaloosa and London: U of Alabama P, 2003.
- Graver, Lawrence. *Carson McCullers*. Menneapolis: U of Minnesota P, 1969.
- McCullers, Carson. *Complete Novels*. NY: The Library of America, 2001.
- McDowell, Margaret B. *Carson McCullers*. Boston: Twayne, 1980.
- Westling, Louise. “Tomboys and Revolting Femininity.” Clark and Friedman 155-165.
- ドゥルーズ, ジル, フェリックス・ガタリ. 『千のプラトー——資本主義と分裂症』 宇野邦一他訳. 東京: 河出書房新社, 1994 年.